

素朴なギターにのせ神に祈る

カカボラジへの道

ミャンマー最北の村で

ミャンマー(旧ビルマ)最北にそびえる同国最高峰で未踏のカカボラジ(標高五、八八一メートル)。一帯は内戦や鎖国政策などで、第二次大戦以来外国人の入山が閉ざされてきた地域だ。今回、一橋大山岳会の偵察行に同行して、外国報道陣として初めて取材が許された。約半世紀ぶりに開かれた北部ミャンマーの人々と自然を紹介する。

(文・上堀慶、写真・川口敏彦)

「仏教国」に響く賛美歌

賛美歌のハーモニーが冷えた外気を震わせる。偵察隊と共に行動しているラワン族ポーターたちの歌声だ。ミャンマー最北の町アタラにはたき火で暖をとりながら、見事な合唱を響かせていた。

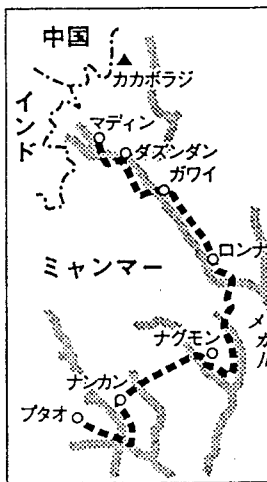
首都ヤンゴンから北へ千二百キロ、最北部のカチン州ナグモン郡に住む少数民族

族のラワン族。ほとんどが伴奏の賛美歌が、逆に村は約五万人。「また増え続

キリスト教の敬けんな信者たちだ。半世紀前には見られた自然崇拜宗教は、英領植民地時代に行われた米国人宣教師の布教活動で一掃されてしまったらしい。

どの村にも必ず教会があるが、比較的開けた街ナグモン教会でも、トタンぶきの屋根に粗末な木のいすを置いただけ。素朴なギター

カカボラジ偵察隊ルート



【注】本紙ではミャンマー最高峰の表記を「カカルボラジ」としてきましたが、今後は現地での呼称にならって「カカボラジ」(ラワン語で「きやかな山、喜びの声がする山の意」としま

す。)

カカボラジへの道

ミャンマー最北の村で

2



一橋大山岳会の偵察隊 プタオの北東の村ナンカ(引地真隊長ら三人)が、ンでは、古老が出迎えてく起点となる北部の町プタオ された。案内された村の裏手を出発したのは二月十四日では、子供や女性を含む八日。カカボラジ山ろくの村 十人あまりが総出で、人のマディンまでの片道約百七 背ほどまでに土砂を掘り起十時の行程を、ほぼ一か月 こし、竹かごや、洗濯板のかけて踏査する偵察行のす ような道具でこしていた。タートだった。 マリカ川支流での砂金採り

水の流れと共に暮らす

砂金のまざった砂を川に運ぶ女性たち。重労働だが笑顔は絶えない(ナンカンで)

風景だ。約三十年前まで、村はラワン語でシェル・パン・ダン(金の平原の意)と呼ばれた。金はプタオの市場で、一々約千三百チャット(約千三百円)で取引される。鶏一羽が二百チャットの現地で、貴重な現金収入となる。カカボラジへと続くキヤラバン・ルートは、インド側から続くマリカ川、中国側から流れるメカ川と複雑に絡み合う。約二百キロで合流してミャンマーの大動脈・イラワジ川となる両河川は、砂金掘りが随所に見られ、村人たちの産業の一つとして成り立っている。「滝がそんなに珍しいのかい」。ガイドのマン・ホン・ミンさん(六五)の言葉に、私たちは苦笑いした。それほどまでに、数えきれない大小様々な滝や沢と出会う。飲料水をくむのも、洗濯も同じ川。所々に浮かぶ丸木舟は、ダイナマイトで魚を仮死状態にさせる魚に使われる。点在する村をつなぐ無数の水の流れは、村民の暮らしを支えていた。(文・上堀慶、写真・川口敏彦)

カカボラジへの道

ミャンマー最北の村で

3



生い茂るジャングルをかき分けながら進むうちに、目の前が開けて水田が見えてくると、思わずほっとする。集落が近くなり、その日の宿が近づいた証拠だ。この地には「一宿一飯の情」がまだ息つき、旅人は空いている小屋や部屋を問借りして雨風をしのぐ。

旅人にやさしい竹の里

ラワンの民族ダンスを披露してくれた村民たち。あちこちの村から集まったポーターたちも和気あいあい(ロンナで)

ロンナの宿では興がのり、夜にもかかわらず地元民たちが陽気に民族ダンスを披露してくれた。楽器の伴奏はないが、息がピッタリあったステップは、遠い国から訪れた一橋大山岳会の隊員や私たちを喜ばせてくれた。竹を組み合わせただけの高床式住居は、壁も床もすき間だらけだから、囲炉裏があっても二酸化炭素中毒になる心配はない。床下にはニワトリやプタ、ヤギなどの家畜を飼っていて、すき間から落ちた食事のカスがエサになる。その家畜が夕飯の食卓に並ぶことも多い。無駄のない、連鎖を目的の当りにして、また暗い午前二時には鳴き始めるニワトリたちに起こされ、寝不足に悩まされても許してしまう気持ちになる。竹を組み合わせた橋がかり、竹筒で水をくみ、まきにも竹を使う。竹、竹、竹。旅人にやさしい地域は、「竹の文化圏」でもあった。(文・上堀慶、写真・川口敏彦)



カカボラジへの道

ミャンマー最北の村で

6

午後八時。村人が「テレ 時間だったが、この電気を びやつてるから見に来なさい 生み出すために要するガソ ン」と、どかどかと私た リンは約十二時、三千六百 ちの小屋に押し掛けてき チャット(約三千六百円) た。ここナ グモン町 は、プタオ からマティ ンへの行程 の中で唯一 電気が通り、数台の発電機 もある。

集会場内の「街頭テレ ビ」は、放映時間たった一 発電機があるナグモンでは 村人たちの夜の楽しみはテ レビ。ドラマの展開にみんな で笑い、みんなで泣く

山村にも開発の波

元の法秩序回復評議会(ORC)のウィン・ペ議長が「型選んで博物館みたいで すけど」と町の発電所を案 内してくれた。八〇年旧チ エコスロバキア製発電機は 六年前から使用しており、 七十八馬力で毎日一―三時 間ほど電気を流している。 た。次なる辺境開発のため の参考にするのだから 車道が整 い、市場に 並ぶ商品が 変わり、みるみる便利にな る山間の村々。だが、「マ ディンまで車で行けるよう な時代は望まない」とい うナグモンの古老のつぶや きも耳に残った。

もかかる。普通の大人の約 三か月の稼ぎにあたるせ いにたくな楽しみ。香港の衛 屋放送も見られるとあっ て、立錫の余地もないほど 集会場を埋めた人々の間で チャンネル争いが起きるほ どだ。 軍事政権の下部組織、地 元(おわり) (文・上堀慶、写真・川 口敏彦)